春日潛庵による『蕺山人譜』『王心斎全集』の出版をめぐって

福田　殖

一、はじめに

春日潛庵（一八一一―七八・文化八年八月三日生―明治一一年三月二十三日歿）は京都の人で、幕末維新期の激動の時に、陽明学者として、政治にも関与して活躍した人物である。

潛庵、姓は源、春日氏、諱は仲襄、字は子賛、十歳の時、従六位上、讃岐守に叙任、幼名、直之助を仲好と改め、十七歳、正六位下、二十四歳、再び仲襄に改名、久我家加判に列して久我家の家政を見、同年、従五位下に昇叙、以後、官位の昇進を固辞、歿後、正四位を下賜された。

潛庵は、はじめ友人の富松万山のすすめにより、鈴木遺音の門に入り、崎門の朱子学を学んだが、後、二十歳の時、友人の家で『王陽明文録抄』を読んで悟るところがあり、二十七歳の時に『王陽明全集』を獲て日夜講究し、二十八歳の時に『蕺山人譜』を読み、三十歳の時に『劉子全書』を手に入れている。

潛庵は、はじめ朱子学を学んだ後に、陽明学に転じたが、その陽明学は、明末の劉蕺山（一五七八―一六四五　名は宗周、字は起東、号は念台・蕺山　官職は工部侍郎から左都御史を歴任、杭州が清軍に攻略されるや、絶食殉死した）の出現によって、王陽明の学問が精かつ粋となり、陽明亜流が流蕩におちいった弊害を救ったと認識する上に立って、劉宗周の学問を媒介とする陽明学であった。

潛庵は二十四歳から二十九歳まで久我家の家政をつかさどり、大きな実績をあげたが、三十歳の正月、関白鷹司正通より遠慮閉門を命ぜられ、四月に遠慮閉門は解かれるが、再び久我家の執政として家政をつかさどるのは四十歳の時

であった。

潜庵の三十代は、久我家の執政を離れて比較的に自由な時代であったと思われる。この時期に『蕺山人譜』と『王心斎全集』とを出版している。この両書の出版をめぐって、潜庵の学問的立場と思想的特色をさぐってみようと思う。両書の出版については、従来の研究でも必ず言及されてきたが、その意義については、必ずしも掘り下げて検討されることは殆んどなかった。

そこで次章において先行研究を中心に潜庵研究はどのように進められたかについて、先ずは概括をこころみたい。

二、潜庵に関する先行研究と基礎史料

最も早いものとしては、潜庵の著名な門人である末広鉄腸（一八四九―九六　新聞記者、小説家・政治家。本名重恭）の筆になる①「潜庵先生小伝」[1]がある。

鉄腸は先ず「本邦、王陽明の学を以て聞ゆる者、中江藤樹は道徳を以てし、熊沢蕃山は識見事業を以てし、三輪執斎は学問文章を以てして、先生は則ち蓋し集大成者なり」と述べ日本陽明学掉尾を飾る集大成者と高く評価して、その道徳学問と識見政事における潜庵の業績を簡明に叙述している。

次に令息、春日仲淵の②『北山心史』（明治三十九年、未見）が出、さらに令孫、春日仲精の③『春日潜庵先生影迹』（大正四年）が出て、潜庵の伝記はより詳しくなり、その後、太田虹村の④『春日潜庵伝』（昭和三年刊、未見）が出版されて、戦前における潜庵伝記史料は一応、形を整えるに至ったといえよう。

戦後もしばらく時間が経過して、大西晴隆氏の⑤『春日潜庵』（「叢書日本の思想家」所収。明徳出版社。疋田啓佑氏『池田草庵』と合冊。昭和六十二年十二月）が出版された。

大西氏によれば、「潜庵の人物・学術・行蔵をできるかぎり客観的に把握することこそ正当な評価の前提である」（同書十一頁）という立場から、一般的に知られざる潜庵の実像を明らかにしようとされたごとくである。

そして史料の博捜駆使による実証的な研究によって春日潜庵の全体像が、我々の前に明らかにされたといえよう。

最近では吉田公平氏の⑥「春日潜庵の晩年―村上作夫『東遊日記』の世界―」（東洋大学アジア文化研究所「研究年報」二〇〇四年　第三十九号　二〇〇五年二月発行）及び吉田

公平・森博　両氏共著の⑦「村上作夫の『東遊日記』について」（東洋古典研究　第十九集　二〇〇五年五月）が世に出た。

この両篇によって、春日潜庵の晩年期（明治六年、六十三歳）の具体的生活実態と、儒学者であり、陽明学者としての潜庵の学問思索の内容が、村上作夫という、すぐれた門人であり、後に京都でジャーナリストとして活躍した人物の「日記」によって、明らかになった。

これらによって新儒教を受容した幕末維新期の知識人が、明治初期の激動の時代、西洋の文物の流入の真只中で、どのように思索を継続したかという貴重な体験を語る第一次史料が提供されたことになり、春日潜庵研究により厚みを加えることになったといえよう。

春日潜庵の原史料の多くは、おそらく安政元年（一八五四）の内裏火災の折、自宅が類焼したことと、その後の漢文牘、俗牘、文章等も安政五年の大獄の時に幕吏から没収されたり、また自ら焚いたりして、かなり失われたごとくである。

⑧『潜庵遺稿』三巻は、明治二十六年（一八九三）四月に令息、春日仲淵が青木嵩山堂より出版した活字本で、最も重要な基礎資料集である。

昭和七年（一九三二）に内田周平と岡直養とが協力して、楠本碩水原輯の『朱紫合編』を⑨『朱王合編』と改題して刊行した。これは幕末維持期に活躍した朱王学者の往復書簡（漢字牘）が主なるもので、なかには前述の末広鉄腸の「潜庵先生小伝」も転載されている。

昭和四十七年（一九七二）三月、岩波書店より⑩『近世後期儒家集』（中村幸彦・岡田武彦校注・日本思想大系四十七）が出版された。その中に「大橋訥庵書簡」と「鳴鶴相和集」（共に俗牘）が岡田武彦校注として掲載されている。

昭和四十七年（一九七二）十二月に明徳出版社より「陽明学大系第九巻」として⑪『日本の陽明学（下）』が出版された。この書物は岡田武彦先生が主編者で、「林良斎」（岡田武彦訳注）「池田草庵」（疋田啓佑訳注）「春日潜庵」（高橋正和訳注）「吉村秋陽」（菰口治訳注）「東沢瀉」（佐藤仁訳注）の五人の陽明学者の書簡・文章等が訳注の形式で掲載された。

高橋正和氏訳注の「春日潜庵」は、前述の『潜庵遺稿』の中から漢字牘・序・記・潜庵偶筆・閑窓余筆・丙寅録など二十三篇を選録訳注したものである。

昭和四十六年（一九七一）十二月に明徳出版社から「陽

明学大系第十一巻」として⑫『幕末維新　陽明学者書簡集』が出版された。この書物も岡田武彦先生が主編者で「林良斎・池田草庵往復書簡」（山口宗之校注）「池田草庵書簡」（井上忠校注）「吉村秋陽書簡」（岡田武彦・佐藤仁校注）「吉村斐山書簡」（岡田武彦・井上忠校注）「東沢瀉書簡」（井上忠校注）「春日潛庵書簡」（佐藤仁校注）の六人の陽明学者の往復書簡が校注の形式で掲載された。

昭和五十年（一九七五）十二月に明徳出版社から「朱子学大系第十四巻」として⑬『幕末維新　朱子学者書簡集』が出版された。この書簡集も岡田武彦先生が主編者で、「大橋訥庵書簡」「楠本端山書簡」「楠本碩水書簡」「並木栗水書簡」「楠本碩水・並木栗水論学書」の四人の朱子学者の往復書簡が出版された。資料の蒐集と解読は岡田武彦・井上忠の両氏、校注は藪敏也・福田殖両氏がそれぞれ担当。両書簡集とも俗牘（和文の書簡）である。

以上が春日潛庵に関する主要な基礎資料と考えられるが、次にこれらの資料を利用して『蕺山人譜』『王心斎全集』がどのようにして出版されるに至ったかについて、そのいきさつと問題点について考えていきたい。

三、『蕺山人譜』の出版をめぐって（一）

『春日潛庵先生影迹』の「年譜」弘化三年丙午先生三十六歳の項に「五月蕺山人譜を刻し其序文を撰す」とあり、同書の第三章「学説」にも「乃ち人譜に序文を載し、書林に命じて之を翻刻せしめたり」とあり「刻蕺山人譜序」を載せ（同書二八頁）、第三章末に○蕺山人譜一冊弘化三年刊本（同三二頁）と記している。

『改訂内閣文庫漢籍分類目録』子部一儒家類（一七五頁）に「蕺山先生　人譜　一巻人譜類記二巻　明劉宗周　清嘉慶一六序刊（道光四印）の清刊本（五冊）と「人譜　正篇　明劉宗周　弘化三序刊」の和刻本（一冊）の書名が見える。この弘化三序刊本（未見）が春日潛庵出版の書物と思われるが、序刊本とあるので、弘化三年に刊行されたという刊記（木記）は見られないようである。

潛庵は天保九年戊戌（一八三八）二十八歳の季冬に始めて『人譜』を読んだ。

その時の感動を当時、但馬に帰省していた友人の池田草庵にすぐさま書き送っている。

その書簡[2]は漢文牘である。この書簡は潛庵の学問を考え

る上で重要である。以下に検討を加えていきたい。

子敬足下、頃ごろ、襄、明の劉蕺山先生の著はすところの人譜を獲たり。先生、名は宗周、字は起東、所謂念台先生なる者なり。先生、精忠大節にして鼎革の際に食せざること二十余日にして卒す。襄、嘗って其の平生を考へ、悚然として敬嘆し、潸然として悲慕し、乃ち思ふ、吾其の人に見ふを得ざるも、其の書を見るを得ば、則ち我も亦た当に努力して以て古人の域に造るべきなり、と。今、其の書を獲たり。我、以て吾が懐ひを慰むべし。

右の書簡中で潜庵は「嘗って其の平生を考へ云云」と述べている。おそらく、それ以前に『明儒学案』などで劉宗周のことは熟知していたものと思われる。またその人に現実に会うことができなくても、その人の書物を読むことができれば、努力して、その人（古人）の領域に近づくことができるという。潜庵が「千古尚友」という語を坐右に掲げた心情につながることばである。

同書簡文は続いて、劉宗周の学問が陽明を宗主とし、致（良）知を要とし慎独を主とすること。人譜（人が本当の人間となるための教え）を作って学問に志す者に授けたこと。陽明の致良知の教えは孟子に本づき、更に詳細明瞭になったこと。しかし陽明学末流の弊害は、良知の現存在を知っても（現成の良知は学問知見をかりずに存在する）、良知を致すことを知らない（良知を正しくおし及ぼすことを知らない）。（その結果）狂肆放蕩（自由奔放になって規律を乱すこと）になり、良知が変化して私知となった。『人譜』という書物は、そうした弊害を救うことのできるものである、と。

ここまでは、中国で王陽明が出現して、良知の教えを説いたが末流になって、学問的に堕落したことを述べている。

これ以後は方今の陽明学信奉者が寥々として少ないことを嘆いている。方今とは天保九年を指すであろう。清朝では道光十八年（一八三八）にあたる。二年後にアヘン戦争が発生する前後の時代である。続いて潜庵は二歳年少の友人、池田草庵に「子敬君よ」と以下のごとく呼びかける。

人間が本心（孟子や陸象山が強調する人間が本来持っている良心）を失って以来、名利の習が天下を陥溺させ、聡明・英特、才知の士も、ふるい立って、その名利の中から抜け出だすことができない。汲汲営営として、心を読書や講学に用うる者も、ただただ名利のためのみである。草庵への

呼びかけである文脈ということを考えると、当時の日本の知識人（士）全般に対する批判でもあった。

次に中国における陽明学の変遷を概見していう。陽明の学問は、名利の習を除いて天下の陥溺せる状況を救済するのに十分なものではあった。しかしながら「慎独」の功がなければ、「私知」を「良知」としない者も、また少なくないであろう。陽明門下の諸子で王龍渓や王心斎のような高弟は、致良知の本旨を聞いているはずである。しかしながら往々にして弊害がないわけではない。

鄒東郭・劉両峯・羅念庵・聶雙江のような人物はみな師の本旨を失わなかった。そして劉蕺山になって陽明の精粋を得たのである。大節を確立して食せずして卒したのは、はたして偶然であろうか。慎独のくふうが熟成して良知を致したので、そのようになったのである。

蕺山は一代の名儒であって大節・学術がこのようであった。『人譜』の一書には平生の学術が具備している。今、この書を手に入れた。わが心にとって（の喜びは）如何ばかりか。天下の人で、この書を信ずるかどうかは、どうでもよいことである。

子敬君よ、冬が終り春になって、京に帰ってきたら、私を訪ねてほしい。窮居索寞たる一室の内にも寒梅がある。茶を入れて、この『人譜』をとり出して共に切磋講明しよう。

この草庵宛の潜庵の漢文牘について、後に（弘化四年）草庵は林良斎宛の俗牘の中で、「此書春日文章中ニ而モ一番之上出来之様ニ相覚候」[3]と述べた。『人譜』を手に入れて読んだ学問的感動が熱誠の鋭い波動によって伝えられることを意味しよう。草庵は潜庵の影響で劉蕺山の学問のことを知り、一生涯、『人譜』を尊信し、学徒に入門書として教えて倦むことがなかった。林良斎も草庵を通じて、春日潜庵を知り、劉蕺山への傾倒と共鳴を潜庵に書簡で告げている。林良斎と池田草庵は短時間であるが会う機会があったが、潜庵と良斎とは深い理解を通じながら、良斎が四十三歳という若さで歿したこともあり遂に相会うことはなかった。

潜庵は天保十一年庚子（一八四〇）三十歳の時に『劉子全書』を手に入れた。

天保元年（一八三〇）からこの年まで十一年経過しているが、天保の時代は潜庵にとっても時代にとっても多くの事があり、潜庵の学問形成にとって最も重要な時期と思われるので、この約十年間のことを簡単に概括しておきたい。

天保元年潜庵二十歳のこの年、友人の神晋斎の家で『王陽明文禄抄』を読んで深く心中に契合したという。朱子学から陽明学へと転ずる初動的萌芽である。

天保三年（一八三二）には天保の大飢饉が始まり、それは天保八年（一八三七）まで続く大規模なものであったが、この天保三年二十二歳の時に、馬来南城・相馬九方・山田方谷・池田草庵らと往来し、学問・文章が大いに進んだという。(4)

天保六年（一八三五）浪華に遊び、大塩中斎を訪問するが中斎が祭祀中で会えなかった。

天保八年（一八三七）大塩中斎の乱が大阪で起きたが、潜庵はこの年『王陽明全集』を手に入れ日夜、発奮して誦読したという。「狂妄疎誕は気節に似て気節にあらず」と考える潜庵は大塩中斎を「一妄人、王学を知る者にあらず」とし、乱以後、王学を排斥する風潮に敢然と立ち向かった。

潜庵は草庵宛の書簡中で「年二十七、始めて陽明子の書を得て、日夜に思ひを尽くして誦講し、爽然として自失し、慨然として奮興し、忽焉として轍を改む」(5)と心のうちを打ち明けた。

この書簡によると二十七歳の時『王陽明全集』を手に入れ、忽焉として朱子学から陽明学へと転向したと親友に告白している。その翌年二十八歳の時に『人譜』を手に入れ、同じく「爽然として自失した」ことを再び親友の草庵に打ちあけている。この二十七歳から二十八歳の経験は、潜庵の学問形成に大きな意味をもつ。この経験が、後年になって、『人譜』と『王心斎全集』の出版へ進むきっかけとなった。

潜庵は弘化三年、三十六歳の時に、『蕺山人譜』を刻するの序文を書く。

潜庵が『蕺山人譜』を読み（二十八歳）、そして『人譜』を刻するの序文を書く（三十六歳）この間に日本で、同時先行して劉宗周の『人譜』を出版した人が出た。谷三山（一八〇二―六八）である。

三、『蕺山人譜』の出版をめぐって（二）

谷三山（名は操・字は子正・存正。三山・淡庵・淡斎と号す。通称は新助・昌平）は大和高市郡八木の米商の子で、家は富裕であった。病弱であったため学問に励み、その学問領域は広く、経伝・正史・稗史・小説まで及んだという。家塾興譲館を開いて評判が高かった。三山は天保元年京都に出て、猪飼敬所（一七六一―一八四五）に入門したごと

くである。敬所によれば「此谷新介当年三十二歳ニ候へ共、博学強識、老拙ニ勝リ、毎々老拙ノ誤ヲ正シ候。所謂後生可畏者ト。老拙常ニ称シ候。方今海内ノ大儒ト称セラレ候人々。皆老拙ヲ畏レ候由承及。老拙ノ所畏。此人ニ御座候。（中略）此人一昨年遊京師。偶一儒ノ勧ニテ。一日ノ長ヲ推シ。執束脩入門。其後毎々書通。大ニ得益候。今三都ノ諸儒。不及僻邑之人。為吾輩愧入候」[6]という。

猪飼敬所は京都の糸商人の子に生れ、学問に励んで碩学大儒となった人物。その学は古注に基づき諸学を折衷する立場とされる。谷三山も、敬所から「好古ノ癖。清儒ト同ジ」[7]と言われているが、「その学は経学を先にして詩文を後にし、古学を宗として学派に拘らず、専ら道義を説いて気節を激励した」[8]と敬所と類似する一面が指摘されている。

なお敬所は三山への返書の中で「足下壮年。家富身閑。好学強識。真可羨也。願通聖賢之旨。明事理。達人情。而不止博通多識ナリ。」と述べ、また「今春ハ貴地へ遊ハス。来春無事ナラハ。必参リ可申候。名勝ハ名所図絵ニテモ足リヌ。足下ト筆談第一ノ望ナリ。」[9]と書いている。「聾碩儒谷三山」と言われるように、三山は人生の途中で耳の障害者となったごとくである。

この谷三山は天保十二年三月に『清本翻刻、劉氏人譜』と表題し『人譜』（「人譜」一巻、「人譜類記」上下二巻）四冊を出版した。この『人譜』は通行したごとくで、現在でも影印本として読むことが可能である。[10]

この谷三山のことを潜庵は森田節斎（一八一一―六八、猪飼敬所・頼山陽に学び、のち昌平校に学ぶ）を通じて知っていたごとくである。潜庵が弘化元年三月十日夜、池田草庵宛の俗牘には次のようにある。

森田氏の友に谷新助と申人有之、名操字子正、即人譜に点付候人に御座候。此人十一二より聾聵、只独学に而甚博誦之由、且甚人物ニ而、孝子の行あり。年来京坂の学術軽薄を厭ひ、独学には候得共、求友の念頭甚切なる由。森田拙に初会晤の時より、此人に可交様甚勧呉れ申候。近来の中には相交可申と娯居申候。森田年来四方へ遊候故、奇士異人其交甚多、今不堪枚挙、子正の事即其一也。[11]

右の書簡で潜庵は、谷新助は『人譜』に点を付けた人であること、十一、二より聾聵であること、森田節斎にすすめられて、近々のうちには交際できることを娯しみにしていることを草庵に書き送っている。

弘化三年は潜庵は三十四歳で谷三山は四十三歳。その三年前に谷三山が点を付けた『劉氏人譜』はすでに刊行されていて、潜庵も、その存在は知っており、おそらく読んでいたと思われる。

谷三山は「人譜類記校訂凡例」の中で、『人譜』には数本有って文章に異同があること、その異同を欄外に掲げることは不可能なので、一、二を補正した以外は、すべて旧貫（道光四年白鎔序刊本のしきたり）により、その（底）本のままに完成させるだけであると、その校訂の基本方針を述べているが、注目すべき点は、次に「改過説の前に訟過法及附録有り。此の本、之を削る。蓋し微意の存する有り。今亦た敢へて補入せず」と述べている点である。

つまり天保十二年刊の『劉氏人譜』には、「訟過法即静坐法」の全文が削除されているのである。

「訟過法」は全文が二六四字にすぎず、その「附録」と称する部分も、本文に比してやや字数が多い程度の短い文章にすぎない。

「訟過法」とは、自らのあやまちを責め、内省する方法で、それを静坐という形式をとって実践したので、劉宗周は附録補注において「静坐法」と名付けたと説明する。

「訟過法即静坐法」は確かに短かい文章であるが、宗周にとっては重要な文章であった。宗周はいう「或ひと予を咎（とが）む、この説（訟過法）は禅に近きものなり、と。予、すでにこれを廃す。すでにしてこれを思ひて曰く、此れ静坐法なり。静坐は学にあらずや。程子、人の静坐を見るごとに、便ち其の善く学ぶを歎ず。」と。宗周は「訟過法」が禅に近いと非難されたため、一度は『人譜』の中から「訟過法」を削除したことがあったが、静坐は学問にほかならないと思いなおし、再び『人譜』の中に採り入れたごとくである。したがって『人譜』数本のうち「訟過法」が削除された刊本があったことも想定でき、谷三山がそれを底本としたことも考えられる。

一度廃した「訟過法」を再び存して廃さないために「即静坐法」なる注をいれたのである。

「静坐」はもと禅佛教の「坐禅」の形式を新儒教がとりこんで成立させた身心の修養法である。そこで常に「禅」との近似性が問題とされた。宗周も高忠憲の静坐説に二種類あって、一つは撤手懸崖（さっしゅけんがい）の工夫（くふう）（がけの上で手をはなすような命がけの工夫、頓悟の方法）あと一つは小心著地の工夫（細心で謹しみ深く工夫する、漸修の方法）であるが、

後者を正しいとしたのは、前者は禅まがいととられかねなかったからである。

劉宗周は『人譜』の自序の中で、友人から袁了凡の功過格が示されたこと。これを読んで疑問を感じたこと。了凡は「かつて旨を雲谷老人に授かる」とし、その一生の転移果報は、功過に取って確実でまちがいがないと言うが、そんなことはあるはずがないとし、了凡は人に遠ざかってそれを道となすものであり、老氏仏氏の高妙な説もその要領は自私自利に帰するので、吾が儒の恵廸従逆の趣旨（人の道に従えば吉、その逆に従えば凶となる）とは天と地との差があるとする。そして了凡は儒を学ぶ者なのに因果を信じ、それが世の中に伝染していき、今に至りて、度世（一般の人々を救済する）の手引書となっている。そこで自分（宗周）は人が人であることを証する意に本づいて人極図説を著して学ぶ者に示すのである。そしてこれにしたがって聖人（儒教がかかげる理想的人物像）の領域に至ろうとするのである、と。

『人譜』は崇禎七年に書かれたが、その後改訂が加えられ臨終の時まで続けられたごとくである。[13] 宗周は乙酉（弘光元年一六四五）五月に改訂した後、六月戊寅の日に長子の伯縄に示して、「人と做るの方は是の譜に尽せり」と言ったという。[14]

宗周は明代儒学思想界の掉尾を飾る大思想家であり、その集大成者でもあった。袁了凡の功過格が民間の民族道徳として広く展開していっている現象に危機意識をもち、それに対抗し、聖学（儒学）の要領を明らかにしようとして書かれたのが、『人譜』なのである。『人譜』は多くの人士を対象とし、一般社会の民間道徳を意識して書かれたものでもあった。

潜庵は弘化三年、三十六歳の時に「蕺山人譜を刻するの序」を書いた。二十八歳で『蕺山人譜』を読み、三十歳で『劉子全書』四十巻を入手して読んだ潜庵は、劉宗周の学問の要領は『人譜』であると確信したことを次のように述べる。

人譜三篇は、蕺山劉氏の著はす所なり。先生の全書は四十巻。其の言、往往にして姚江の秘を闡きて以て支離恍惚の弊を救ふ。而して其の要領を求むれば、乃ち此の篇に外ならず。類記に至りては、固よりこれを事実に徴し、此と相発明す。然れども其の書は未定に属すれば、未だ必ずしも取りてこれに附せず。[15]

潜庵は『人譜』が劉宗周の学問の要領を示すものである

という認識に立って、これを刊刻しようとするが、『人譜類記』は、未定の書であるから、これを附載しないという。谷三山は『人譜類記』をも含めて刊刻したが、潛庵は『人譜』の中にすでに人道の大端は具備しているとして附載しなかった。これも一見識であろう。

次に潛庵は劉宗周の学問の深さは朱子・王陽明の学問を貫いて、それらを融化したところにあり、道徳的実践においても出処進退においても、純粋で余裕がある。いかなる困難な状況に際しても、意を一にし、禍福・得喪・生死も、その心を動かすことはなかった。そして、一身を以て道徳的綱常を永遠に樹立したのである。人道に関係するところは如何ばかりか（はかり知れない）と宗周の学問と篤行を称賛する。

更に方今の学ぶ者のために、この『人譜』を刻す意図を次のように述べる。

学ぶ者苟くも自ら奮抜し、先生の書に由りて姚江（陽明）に沿いて、以て濂洛関閩金谿（周濂渓・程明道・程伊川・張横渠・朱子・陸象山）に溯ぼり、其の淵源を窮め、之を躬に反し、之を思に省して、以て其の自得を求むれば、我の語默動静は衾影に媿ぢず。然る後、諸大儒の同異、得て商るべきなり。予、怪しむ、学ぶ者其の自得を求むるを知らずして、徒らに弁を彼の同異に致すも、而れども要領の存する所は、茫乎として其れ寤むること莫きを。何ぞ其の志の陋なるや。故に今の務めは、自得を求むるより急なるは莫し。而して自得を求むるは、人を証するより急なるは莫し。因りて此篇を刻し、同志をして嚮往するところを知らしめん。

潛庵はここで、学ぶ者の「自得」を強調する。「自得」は孔・孟以来、程・朱・陸・王を通じて、学問の必須条件であった。潛庵が親しく交際していた池田草庵・林良斎・吉村秋陽・山田方谷などの陽明学者は勿論のこと、朱子学者であった楠本碩水なども皆「反身自得」を強調してきた。そして当時の陽明学者の多くが、朱子と王陽明には知行説に関しては、異同があるが、その実功は差異はないという認識でほぼ一致していたごとくである。潛庵が、ここで劉宗周を手がかりとして、王陽明によりしたがい、濂洛関閩金谿にさかのぼって、自得を求めることを強調し、いたずらに朱・王の同異に弁を致すことを陋（見識が浅薄）なることとするのは、そうした思想背景をふまえてのことである。

大塩中斎の高弟で多度津藩家老をつとめた林良斎も次のごとく同じ趣旨を述べている。

朱・王の二子、知行の説固より異なれり。然り而して其の実功は、則ち大いには相遠からざるなり。何となれば、朱子は則ち講明を以て知と為し、履踏を行と為す。王子は則ち唯だ一念微に入るに在りて証を取り、知の真切篤実の処を以て行と為し、行の明覚精察の処を以て知と為すのみ。（中略）然らば則ち二子の実功、未だ始めより相合はずんばあらざるなり。而るに世の二子を学ぶ者、競って相呶呶として以て向背をなす。真に所謂同穴の鬪鼠なるかな。[16]

潜庵は同序文の最後で、羅念庵や劉両峰の道に志すの篤きありさまを記して、今の学ぶ者も、古の哲人のように志が、その次元にまで至るならば、きっと学問的覚醒があるだろう、と結んでいる。

潜庵の刊刻した『人譜』では、谷三山が削除した「訟過法」は削除されずに掲載されたごとくである。おそらく『劉子全書』四十巻（道光刊本と思われる）の中にあるものを使うことは可能であったと思われる。

「訟過法」については、林良斎が池田草庵にあてた俗牘の中で次のように述べている。

春日兄ハ不相変読書ヲ専ら被勤候よし。然ルニ劉子『人譜』を翻刻、序文迄被致候事故、かの訟過静坐之法も時々服済被致候事歟と存候処、左様とも無之義哉。小生近来之僻見ニハ、学者劉子訟過之法によらず徒ニ問学仕候者は聞見ニ流候歟、空ニ入候歟、二病之内ヲ不免様奉存候。門人共へも自ら己の痛病ヲ條列為致、自訟録と名付、毎旦工夫を致候様申付候。然ニ此地之人心兎角博覧文章ニ長し不申而八学者之仲間入出来不申様相心得、為己之志一向無御坐。[17]（下略）

池田草庵は「林良斎を祭るの文」を書いているが、疋田啓佑氏は、そのことに関して、「良斎の学は劉念台の自訟慎独を重んじ、本体功夫の一体の道であるので、草庵と最も学問上からみても通じあうものがあった。[18]」と指摘。さらに同氏によれば、「春日潜庵に答ふるの書」という書簡中で、潜庵から草庵が、学問的新功を問われたときに、草庵は高忠憲の「一静自ら能く百障を開く、老翁旧に依りて嬰孩に還る」（高子遺書巻六、静坐吟三首のうちその三）という詩をあげ、これは人生終身の帰宿するところである、と答えた書簡文のあとに、「草庵の交友した友人で最も心

を許した友は林良斎と春日潜庵であった。（中略）草庵の学の根本にある劉念台の学は、潜庵によって草庵にもたらされたものである[19]」と述べている。

潜庵の『人譜』刊刻は同時代の知識人に多くの影響を与えたごとくである。谷三山の『劉氏人譜』も広く流通していたであろうことを考えると、学派を問わず、劉宗周の学問が当時の日本の学術思想界に広く受容されていたことが推測される。これらに関しては別に論じる必要があろうが、今はとりあげない。

潜庵の『人譜』は弘化三年閏五月上旬、『蕺山人譜』を刻し、序文を撰す、とされる。

しかしながら潜庵の草庵あての書簡によると次のごとき記述がある。

先日は人譜校本へ御書入被下、忝奉存候。尚相見合可申と存候。（弘化四年四月八日付）

心斎集は既に上木に相成候。校正出来不申候間、出様次第、河茂より御回し可申様、申付候積に御座候。人譜も出来に相成候。点の事、先達而御沙汰被下候誤りも有之候はば、乍御面倒御示し被下度候。書物の校正甚面倒至極、不面白相覚申候。御憐察可被下候。以後は書物の世話は、先づ相止め可申と存候。（嘉永元年正月廿二日付）

これらによると、弘化四年四月の頃、『人譜』校本に草庵が書入れをしたごとくであり、また嘉永元年正月の頃には、『王心斎全集』はすでに刊行されて、校正はできなかったこと、『人譜』も出来上かったが、点の事では、誤りも有るので、お示し下されたい、と草庵に依頼している。

潜庵が弘化四年孟冬に序文を書いた『王心斎全集』は「皇都寺街通六角南式部町、書林聖華房、山田茂助蔵」「嘉永元年戊申新鐫」として刊行されているので、『人譜』もこの前後に刊行されたものと考えられる。

右書簡の中に「書物の校正甚面倒至極」とあるので『人譜』の校正にはかなり難渋したごとくである。

なお前述の『春日潜庵先生影迹』には、○「蕺山人譜一冊弘化三年刊本」の外に。○「評点蕺山人譜一冊写本[20]」とある。あるいは前述の「人譜校本」とはこれを指すのかもわからない。今のところこれ以上は詳らかにしえない。

大西晴隆氏によれば「閏五月上旬、『蕺山人譜』を刻し、序文を作った。これは翌年になる『王心斎全集』の序文とともに、潜庵みずから「吾が学術を知らんと欲せば、則ち『王

心斎（全集）』及び『劉蕺山人譜』の序文を観れば可なり」（『心史』）と自負するところの大文章である」（⑤『春日潛庵』七五頁）との指摘がある。「心史」は春日仲淵の『北山心史』（未見）であるが、この両序が潛庵の学問を知る上で重要であることはまちがいあるまい。そこで次は、『王心斎全集』の序文についてみていく。

四、『王心斎全集』の出版をめぐって

潛庵は天保八年（二十七歳）に『王陽明全集』を手に入れた前後のことを「記夢」[21]という一文において「年二十七、王子全集を得たり。日夜誦読すること幾数十過、中心豁然たり。覚えず喟然として曰く、人となりては当に是に至りて止むべく、学をなしては当に是の如くにして止むべし。夫の文章のごときは特だ其の余緒なるのみ、と。」と述べている。朱子学から陽明学への一大転向を告白しているのであるが、では潛庵がとらえた陽明学の本質とは如何なるものであったか。続いて「記夢」にいう。

ああ良知の学は至易至簡にして至精なるものなり。惟れ易簡なり。故に夫婦の不肖もまた以て能く行ふべし。惟れ其れ至精なり。故に聖人と雖も尽くす能はざる所有るなり。

良知の学は「易簡にして至精」という潛庵の考え方が『王心斎全集』出版の基本的動機である。特に易簡の学としての良知心学が、あらゆる階層の人々に実践可能な学であることを潛庵は人々に訴えたかったのであろう。ただし、心斎のように聖人志向の高い志がなければ、易簡の学としての良知の学は、狂となるか陋となるという留保条件をつけざるを得なかった。

『王心斎全集』の序文は、宇都宮藩士で、潛庵の塾生の一人、岡田子裕と心斎の文を校訂していたところから書かれており、実に臨場感に富んだ文章である。冒頭の部分を次にあげる。

余・門を杜ぢて却掃すること茲に年有り。誦習の余、終日無事なり。一日、塾士の子裕と心斎の文を校し、乃ち巻を廃し喟然として嘆ず。子裕曰く「先生何すれぞ其れ嘆ずるや、」と。余曰く「蓋し其の流弊を歎ずるのみ」と。「然らば則ち心斎の説に果して弊有るか」と。曰く「否。心斎の説もまた易簡なり。易簡は果して弊有らんや。然りと雖も、後生に庸丈夫の其の易簡の説に縁りて、以て其の陋を飾る者有らば、則ち其の

弊、復た拯ふべからざるなり。

心斎の説は易簡で、そのことに弊害はないが、易簡の説に安易に依拠して、凡人が自らの陋識を飾るようであれば、その弊害は救うことはできないという。

それについて子裕が質問すると、潜庵は答えて大略次のごとくいう。心斎の人がらは特別にすぐれていて、その志を立てて聖人の領域に至らんとするほどである。その上に学問的工夫の用い方は、易簡直截である。後世の人々が心斎ほどの資質を持たず、その志も平凡で低いのに、易簡を喜び、その近道が便利であるとするならば、その流弊は、狂（蕩）とならなければ、陋（浅）となることは必然の勢いである。しかしながらそうはいっても人を啓蒙するのは、易簡の説よりすぐれたものはない。ただその志がどのようであるかにかかっている。

ここで潜庵は易簡直截の道と立志との有機的深い関係を強調する。

次に潜庵は「志」について以下のごとく述べる。

「志」とは軽重短長をはかる権衡・丈尺のようなものであり、少しでもはかりまちがえると、軽重短長がきちんと得られない。聖賢の教は一定不易の権衡・丈尺はあるが、しかしながらその抑揚・進退の工夫のあり方には一定の法はない。そこで聖賢の説の繁簡・難易については工夫を用いるわけなのである。しかしながら権衡が定まっていないと、何を用いて量度するかわからない。志向というものが確立してなければ、何を以て工夫を用いるのかわからない。凡夫は志を立てることを知らずに易簡・捷径（ちかみち）に走ろうとする。これは権衡をもたずに軽重を量って、重きをにくみ、軽きを喜ぶようなものである。

そして潜庵は最後に次のように強調する。

然れども学ぶ者には易簡の説より善きは莫し。易簡は天徳にあらざるか。故に曰く、「人の蒙を発くや、此より善きは莫し、と。子裕曰く「是の如くんば則ち易簡の説にして可なり。而るに又た抑揚進退は、亦た繁難ならずや」と。曰く「之を抑へ、之を揚げ、之を進め、之を退くるは、乃ち夫の易簡に帰するゆえんなり。所謂偏至せざれば、則ち其の力を得ざるなり。而るに後の人、其の志を立つるを知らず。易簡を喜びて以て陋を飾るに至る。ああ此れ豈に心斎の志ならんや。且つ余は子裕と今、斯の学を幽閑落寞の郷に講ずれば、則ち未だ其の流弊の如何を見ざるなり。而るに一旦こ

れを事業に措き、これを顕著なるに試みる者有らんか、乃ち其の弊や立ちどころに見はれん。此れ周ねく思ひて遠く慮ばかざるを得ざるなり」と。子裕曰く「唯」と。因りて其の語を次して以て巻首に弁ぜり。

易簡直截の王心斎の学問の有効性を高く標榜し、その学を実現可能にするのが「立志」にほかならないことを述べて『王心斎全集』を刊行するという。

この和刻本『王心斎全集』二冊が刊刻された時に跋を書いた岡田真吾（名は裕）は、宇都宮の藩士で、弘化三年冬に潜庵塾に入門、それまでの四五年ばかりは江戸に遊学、大橋訥庵の塾で学び、佐藤一斎へも出向いたりして学んだ篤志の士とされている。[22]

岡田裕は若いけれども潜庵から期待されていた人物のごとくである。次の潜庵の書簡に次のように述べている。

宇都宮生は岡田真吾名裕と申候。甚篤志沈実之人に御座候。読書も甚工合能相読申候。此頃王心斎全集を刻に致し候に付、一冊は拙が点を付、一冊は真吾に申付置候。文章は是迄一向好みに無御座候間、此頃より相勧、少々作かけ申候。随分相応に出来可申哉と存候。年は廿六才に相成申候。書生中甚難得之人物と存し申候。元来医者に御座候処、読書も出来候間、儒士に申付に相成候様子に御座候。[23]

門人岡田裕のやや詳しい人物紹介である。

この時、二十六歳の岡田裕が書いた跋によると此の集の半ばを校するよう命ぜられたという。

丁未（弘化四年）の暮春、潜庵先生、此の集を閲し、又た裕をして其の半を校せしむ。裕因りて按ずるに、巻首に劉節・呉悌の薦疏二章を載するも、然れども劉疏已に失し、別本の考ふべき無し。蓋し此の二疏、当時、公（心斎）を進退させる能はず。今や反って此の集に托して行はる。吾人此を読めば、当に以て従ふ所を知るべきか。宇都宮岡田裕謹んで跋す。

嘉靖十六年十一月、巡按直隷監察御史の呉悌の薦疏には、王心斎の「学は自得を主として言語文字の詮に落ちず。且つ少くして觚翰の習無く、長じては声利の場を践まず、平生、異物を見て遷らず。故に其の工夫最も直截簡易。（中略）聖世の逸民と謂うべし」[24]とある。

潜庵も三十五歳の弘化二年に「潜庵の記」を書いたが、その中で「吾少きより尫羸（虚弱体質）にして自ら量るに一も為すべきもの無し。乃ち決然として山林の志有り。（中

略）今我の此に居る、山林にあらずと雖も、殆ど山林の如き者有り。[25]）と述べて、隠逸志向が強かったので、逸民と称された王心斎に親近感を抱いたのであろう。

和刻本『王心斎全集』は、佐野公治氏によれば、広く流布しており、六巻本（八巻本）を底本にしたごとくであるが、なお底本と異同がみられるとのこと、また江戸期以降はほとんどの場合和刻本全集によって心斎学は理解されて来たことなどが指摘されている。[26]

潜庵は、日本における陽明学は藤樹以来、知る者が少ないと山本清磯あての書簡中で次のようにいう。

それ姚江の学、藤樹より後、知る者鮮し。近世此の学を講ずる者蓋し其の名を奉ずるも、而れども其の実を務めず。狂妄・疎誕なるは、気節に似て、気節に非ず。吾其れ此の如くなるを懼る。深思力践して、将に此の学を振起興作して、以て後世に伝へんことを欲せんとす。（『潜庵遺稿』巻二）

中江藤樹は、日本における陽明学の開祖であるが、藤樹は当下現成の良知を強調する王龍渓から陽明学に入った。そして、「良知に致る」ことを説いて、民衆道徳として「良知」の現存在を人々に教え、近江聖人と呼ばれた。藤樹がいう「良知に致る」とは現成の良知を発見保持することで、その方法は、学問知見をかりずに易簡直截になされるものであった。潜庵も、口耳の学が国内に偏くゆきわたり、心身実践の学が寥々たる状況を見て、泰州学派、王心斎の易簡の学を人々に提唱すべく、和刻本『王心斎全集』を刊刻したと思われる。

藤樹が朱子学から陽明学に転じたのは王龍渓語録を読んだことにある。「若し彼が龍渓語録の代りに念庵集や聶双江の困弁録などといふ書物に接したとしたら、恐らく日本王学の開祖となり得なかったかも分からぬ。[27]」と言われているように、王龍渓や王心斎の思想は王陽明晩年の熟成思想を受用して良知現成説をたて拡充的方法論によって陽明思想を発展させていった。特に王龍渓の聖凡平等の当下聖人思想・学問知見を脱却して一超直入に性命に着到せよとする良知現成説は民衆道徳構築に当たって実践主体に強く訴えるものを内包していた。

潜庵は晩年のある日、村上作夫に対して、「龍渓ハ間々虚見ニ渡ルアリト雖モ。畢意聡明ノ人ナリ。其才力念庵ト相当ル。其全集読マサルベカラズ。」と述べたという。[28] 王陽明の思想をより精粋にした劉宗周を篤信する潜庵も若い

時から晩年まで、王心斎や王龍渓の易簡直截にして当下現成の良知を説く思想の魅力と意義を終生忘れることはなかったことを知ることができる。[29]

五、おわりに

中国では聖凡平等の当下聖人観を説く王龍渓や、満街の人すべてこれ聖人、愚夫愚婦と同じきものが同徳であるとする泰州学派の王心斎の系統が明代の風気と合って明末まで盛行したが、日本では、藤樹が王龍渓の当下現成の良知を受容して、良知に致る思想を民衆道徳として構築したが、それ以後の日本陽明学派の人々の方向は中国と同じ方向には進まなかった。そのことに関して楠本正継先生は、日本陽明学派の主要な人物の思想を論じたあと「其史的傾向としては現成的自然主義への方向を取ってゐないといひ得る。これは支那に於ける陸王学の傾向と著しく性質を異にするものであって（中略）当然現成自然主義に至るべき陽明思想を伝へながら、現成自然主義を避けてゐる。（中略）我国陽明学派の先賢達は明に自覚的反省的態度をとって進んで来たのである」[30]と述べておられる。

この日本陽明学の一特色と称する思想的現象をどう解するか、いろいろな解釈があるかも知れないが、今のところ、一つのことが頭に浮かんでくる。それは黄宗羲（一六一〇—九五）の存在である。黄宗羲の『明儒学案』の影響が幕末期の陽明学者には大きかったと思われる。春日潜庵・池田草庵・林良斎・東沢瀉らが軌を一にしたごとくに、王陽明思想をより深く理解するために、黄宗羲の師で、明末に殉国した劉宗周を異常に尊崇するのである。

潜庵の弘化二年五月十一日付の草案宛の書簡によると、「『明儒学案』万言訂本を入手、賈本、莫本トハ異同アリ」[31]とあり、東沢瀉の文久元年十一月八日付の草案宛の書簡にも「劉子全書……蕺山之説聖学之嫡流……学案時々推究」[32]とあり、このころ彼等は『明儒学案』を手に入れて読み、『劉子全書』の存在を知って、学問に励んだと思われる。

潜庵の晩年に入門した村上作夫の『東遊日記』によると、春日潜庵が生涯励んできた学問の履歴というものが散見するが、その中で潜庵・草庵・良斎等の当時の日本陽明学者に共通する学問的立場、陽明思想理解のために、どのような思想家を射程に入れていたかがわかる。[33]そして潜庵や草庵の場合をみると、それは終生変ることはなかった。[34]

このようにわが国の幕末期の陽明学派の思想家たちが自

覚的反省的態度をとって進んできた理由は、一つには黄宗羲の影響、特に『明儒学案』の存在が大きかったと言える。これらの思想史的課題については別に論じていく必要があるであろう。

―了―

〈注〉

(1) 前述⑧『潜庵遺稿』（巻之三、晩年集）の巻末所収、（明治二十六年四月出版）

(2) 同、『潜庵遺稿』巻一　初年集一二～一三頁「与池田子　敬書」

前述⑪『日本の陽明学（下）』一四二頁に「五、池田子敬に与ふるの書」（高橋正和氏訳注）の訓読文がある。

(3) 前述⑫『陽明学者書簡集』の「林良斎・池田草庵往復書簡」三三頁（山口宗之氏校注）参照。

(4) 大西晴隆『春日潜庵』「略年譜」一七二頁

(5) 『潜庵遺稿』（巻一　初年集）「与池田子敬書」、『日本の陽明学（下）』一四三頁

(6) 猪飼敬所の弟子の吉田公寛が『猪飼敬所先生書柬集』巻三、巻末の識語に「因テ思フ天保壬辰（三年）夏。余先師之門ニ入。其秋八月十六日。先師ヨリ賜ハル附啓ニ曰。云々」の中の文である。この識語は嘉永六年夏五月二十四日に書かれている。

(7) 『猪飼敬所先生書柬集』巻三（『日本儒林叢書』第三巻　九十六頁）

(8) 近藤春雄著『日本漢文学大事典』（昭和六十年三月　明治書院）谷三山の項三九八頁。

(9) 注（7）に同じ。八十八頁と九十六頁。

(10) 岡田武彦・荒木見悟主編の「和刻影印近世漢籍叢刊　思想続篇」の中に『劉蕺山文抄・劉氏人譜』が採入されている。巻首に「人譜類記校訂凡例」八条が書かれ末尾に天保辛丑暮春の谷操（三山）の識語がみえる。この影印本には巻末の木記は見えないが、流布した和刻本には巻末に木記がある。それには「天保十二辛丑歳三月翻刻」とあり、三都の書林名として「京都書林一條通智慧光院　石田治兵衛」ほか東都・浪華書林名として「北沢伊八・岡田茂兵衛・岡田新治郎」の名が見える。

(11) ⑫『陽明学者書簡集』五〇三頁。

(12) 袁了凡については酒井忠夫著『中国善書の研究』「第四章　袁了凡の思想と善書」（昭和四十七年十二月国書刊行会）に詳細に論じられている。袁了凡は「己巳の年（隆慶三年）雲谷禅師に教を受け、その宿命論の誤を悟り、雲谷より功過格を授けられ、それによって善行を積み立命の説により自己の運命を開拓することとなった。」（同書三二〇頁）とあり、また「雲谷授袁了凡功過格も、自知録も道蔵本の如く特定の道教教団で使われる功過格からぬけ出て、儒仏道一貫の民間の民族道徳として実践される形式へと移りかわる過程に生まれたものである」（同書三七八頁）とされ、袁了凡の功過格、蓮池の自知録の他に劉念台の人譜の概略が述べられている。（同書三八六頁）。

(13) 『人譜』「改過説三」の末尾に宗周の長子、劉汋の識語がありていう「按ずるに人譜は甲戌（崇禎七年一六三四）に作らる。丁丑（崇禎十年）に重訂されて、是の譜は則ち乙酉（福王弘光元年一六四五）五月の絶筆なり。一句一字、皆な再三の参

訂を経て成る。向きに呉巒稱は湖に初刻し、鮑長儒は杭に再刻す。倶に旧本なり。読む者は諸れを弁じ、先君子の岐に臨むの苦心に負くこと無かれ。己丑（永明王永暦三年一六四九）孟秋、不孝の男汋百拜し謹んで識す。」と。

(14) 門人董瑒の「劉子全書抄述」第二条。（清、道光刊本影印『劉子全書』四十巻の巻首所収）

(15) 『潛庵遺稿』巻之二　中年集　「刻蕺山人譜序」及び『日本の陽明学（下）』一六四頁）

(16) 『日本の陽明学（下）』林良斎・自明軒遺稿抄（二三）六五頁。

(17) 『陽明学者書簡集』林良斎・池田草庵往復書簡　八三頁。

(18) 『日本の陽明学（下）』一二八頁。

(19) 同上、一二四頁。

(20) 第三章「学説」の末尾　三二頁。

(21) 『潛庵遺稿』巻三　晩年集　「記夢」『日本の陽明学』（下）一四四頁。

(22) 弘化四年正月八日夜付の潛庵から池田草庵宛の書簡（『陽明学者書簡集』五一六頁。

(23) 弘化四年三月十八日付の池田草庵宛の書簡（『陽明学者書簡集』五二〇頁）

(24) 和刻本『王心斎全集』巻首に載す。

(25) 『潛庵遺稿』巻二　中年集「潛庵記」『日本の陽明学（下）』一六八頁。

(26) 佐野公治氏「王心斎全集解題」（和刻影印近世漢籍叢刊　思想続編　『王心斎全集』　中文出版社　所収）及び同氏による解説「王心斎」（陽明学大系第六巻『陽明門下　（中）』昭和四十八年三月　明徳出版社）参照。

(27) 楠本正継「日本陽明学派の一特色」（『楠本正継先生中国哲学研究』（国士舘大学附属図書館編　昭和五十年三月）六〇八頁

(28) 吉田公平・森博「村上作夫の『東遊日記』について」（東洋古典学研究第十九集二〇〇五年五月）一五九頁

(29) 前注（26）の楠本正継「日本陽明学派の一特色」に「春日潛庵は一面灑落の風があると共に、又豪邁の所があって、現成説に近づき得る人のやうに見える。彼は王心斎集を刻しすらした。」（六一六頁）とある。

(30) 同上、六一八頁。

(31) 『陽明学者書簡集』五〇五頁。

(32) 同上、四七〇頁。

(33) （28）の同論文一五二頁に明治六年七月十日の日記の部分が載っている。「先生ニ見ユ。先生曰ク。予常ニ人ニ『学案』ヲ読ムヲ教ユル。先ツ最緊要ノ諸家ヲ読マシム。其泛ニ渡リ要ヲ得サルヲ恐ルレハナリ。緊要ノ諸家。姚江・蕺山二大先生ハ格別。其他十家。（鄒）東廓・（羅）念庵・（劉）両峯・（聶）双江・（王）塘南・（万）思默・及ヒ前ニ（呉）康斎・（陳）白沙。後ニ（顧）涇陽・（高）景逸是ナリ。」

(34) 前述の村上作夫の『東遊日記』には、会読が毎回行われており、そのテキストは常に『伝習録』であり、次は『劉子年譜』『劉子行状』『劉子証学新解』『劉子原旨』『劉子全書』等が、日によって選ばれている。また疋田啓佑氏によると、草庵書院の教授五段階のうち最後の段階の塾生の教科書は『伝習録』『劉氏人譜』『儒門語要』であったという。『日本の陽明学（下）』（陽明学大系第十巻　昭和四十七年十二月、明徳出

版社）「草庵文集抄」一三一頁参照。

（以上）

（久留米大学客員教授）